

Karṇakagomin と Abhayadeva

宇 野 智 行

0. *Pramāṇavārttikā* (以下PV) の第一章 Svārthānumānapariccheda の自注に対する三つの復注のうち Karṇakagomin の *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā* (以下PVS-VT) がこれに先行する Śākyabuddhi の *Ṭīkā* (以下PVT) を殆どそのまま利用していることは、既にシュタインケルナー氏によって指摘されている¹⁾。PVS-VT は PV の語義解釈をほぼ PVT に依っており、その他の細かい議論もそれ以前の Dharmakīrti 作品の注釈書群に基づいたものとなっている。本稿では、このような PVS-VT が、白衣派ジャイナ学僧 Abhayadeva Sūri (11世紀) の *Tattvabodhavidhāyinī* (以下TBV) において抜粋、利用される例を紹介し、PVS-VT を利用する Abhayadeva の意図について論述したい²⁾。なお末尾に、TBV に基づく PVS-VT のテキスト訂正可能例を付しておく。

1. 既に渡辺重朗氏によって Abhayadeva が TBV において古典 Cārvāka 派の認識論を否定する為 PVS-VT を援用することが発表されている³⁾が、本稿で紹介する両書の対応箇所 (PVS-VT p. 9, 3-p. 11, 17 と TBV p. 569, 24-p. 571, 19) は渡辺氏が未だ指摘されていないものであり、勿論 PVT にも対応しない。対応箇所は PVS-VT においては、PV I. v. 3 (pakṣadharmas tadamśena vyāpto hetus tridhaiva saḥ/avinābhāvanīyamād dhetvābhāsas tato 'pare//) の注釈冒頭部分の一部に相当するものであり、v. 3 の概要説明および語義解釈がなされた後の証因の特徴に関する論争部分に当たる。ここでは主に以下のような反論が導入され、これに対する仏教徒の答論が述べられている。

- (1) 主題所属性 (pakṣadharmatva) という証因の特徴は述べる必要がない⁴⁾。
- (2) 三つの証因 (svabhāva, kārya, anupalabdhi) は主題所属性を持たない⁵⁾。
- (3) 証因が主題所属性を持たない場合にも推理が成り立つ例がある⁶⁾。

このように当該箇所は PV I. v. 3 に述べられる証因の特徴、とりわけ主題所属性についての議論に終始しており、Karṇakagomin がこれらの議論を主題所属性という証因の特徴が推理に不可欠であることを説明する為に導入したことは明らかである。PVS-VT が PV 自注に対する注釈である限り、この Karṇakagomin

の意図は当然至極のことと言えよう。

2. 一方, TBV においても PVSVT と全くパラレルな議論展開になるが, 対応箇所が導入される部分は, 仏教徒の推理の定義に基づいてニャーヤ学派の推理の定義を述べる *Nyāyasūtra* 1. 1. 5 を批判するという形をとっている。このニャーヤ学派批判の中で, Abhayadeva は *Nyāyabhāṣya* 中の ‘pūrvavat’ の第二解釈, つまり ‘pūrvavat’ という語の ‘vat’ という接辞を 〈matUP〉接辞ではなく, 行為の類似性を表示する 〈vatI〉接辞と理解する解釈⁷⁾を紹介し, これを批判する部分にこの対応箇所を挿入しているのである。

喩例のダルミン (例えば 〈カマド〉) において 〈煙〉が見られると共に 〈火〉が見られることを前提とし, これと同様に所証のダルミンである 〈山〉においても 〈煙〉が見られることから 〈火〉を推理するというニャーヤ説⁸⁾に従えば, 直接知覚によって 〈煙〉と 〈火〉の論理的必然関係が理解されることになる。その結果, 喩例のダルミンにおいて 〈煙〉と 〈火〉を直接知覚しただけで所証のダルミンにおいて 〈火〉を推理することが成り立つことになってしまうのである⁹⁾。さらに, もし直接知覚が一切を包括する形で (sarvopasaṃhāreṇa) 〈煙〉と 〈火〉の論理的必然関係を理解せしめるなら, 〈煙〉の知覚によって空間的に遮られた 〈火〉を理解することが出来ることになり, 推理が無意味になってしまう¹⁰⁾。Abhayadeva は, 遍充関係は直接知覚や推理ではなく, 別のプラマーナによって把握され, しかも一切を包括する形で把握される, と主張するのである¹¹⁾。

そして Abhayadeva は上記の議論の後に, 以下のように PVSVT と対応する議論を開始する。

【反論】 一切のものを包括する形で遍充が把握されるとしても, 推理はプラマーナたる資格を持つことはないであろう。何故なら [推理は] 遍充関係を把握せしめるプラマーナによって既に理解されたものを対象としているので, 想起となるからである¹²⁾。

遍充関係が直接知覚・推理以外の何らかのプラマーナによって把握されるとしても, それが一切を包括する形で把握されるのならば, 直接知覚の場合と同じく上記のような反論が想定されうることになろう。そしてこの反論に対する答論もまた PVSVT をそのまま利用しており, 「遍充関係の把握だけでは, 『この主題のダルミンにいま論証されるべきダルマが存在する』というような個別性を伴った確定知が生じることはない」¹³⁾ので推理はプラマーナであると答えるのである。これ以降も PVSVT と完全に対応する議論が続くが, Abhayadeva は対応箇所の最後に「故に我々の見解においては, 一切を包括する形で遍充関係が把握され

でも推理が生じないわけではない」¹⁴⁾とまとめている。このまとめからも理解出来るように、上記の反論・答論以外の議論は全て付け足しに過ぎず、Abhayadeva は対応箇所の議論を、Karaṇakagomin が意図していたように主題所属性という証因の特徴を成り立たしめる為に述べたのではなく、遍充関係が一切を包括する形で把握されても推理は成立するという事を主張する為に述べたことは明らかである。結局 Abhayadeva は、この対応箇所の議論によってニャーヤ学派による‘pūrvavat’の第二解釈を否定することだけを意図していたことになる。

3. TBV においては、他学派の学説を否定する為に別の学派の学説を援用する手法がしばしば見られる¹⁵⁾。当該箇所においても、Abhayadeva が仏教徒の推理の定義を積極的に認めているわけではなく、単に他学派の学説を否定するために PVSVT を利用していることは明らかである¹⁶⁾。このように自派の学説によって他学派を批判するのではなく、他学派の典籍をもって相殺するという Abhayadeva の態度は、後発ともいえるジャイナ論理学、さらには相対論を奉じるジャイナ教そのものの特徴を表していると言えよう。

[APPENDIX]

PVSVT	TBV
<9, 27> <u>tasmād pratipannaviśiṣṭa-</u>	<570, 6> <u>tenāpratipannaviśiṣṭa-</u>
<9, 29> <u>sādhyaḍharminānyadeśād-</u> <u>isthaḥ</u>	<570, 7> <u>sādhyaḍharminānyadeśād-</u> <u>isthaḥ</u>
<9, 31> <u>na tu dhamamātrād</u>	<570, 9> <u>na ca dhūmamātrād</u>
<10, 4> <u>pakṣadharmaśyoktatvāt</u>	<570, 13> <u>pakṣadharmaśyoktatvāt</u>
<10, 11> <u>evaṃ pratyakṣadharma-</u> <u>tvam</u>	<570, 17> <u>evaṃ yat pakṣadharmaśyoktatvāt</u>
<10, 12> <u>pūrvoktānyadharmaśyoktatvād-</u> <u>arśanād</u>	<570, 18> <u>pūrvoktānyadharmaśyoktatvād-</u> <u>arśanād</u>
	<195, 8> <u>pūrvoktānyadharmaśyoktatvād-</u> <u>arśanād</u> ¹⁷⁾
<10, 18> <u>lakṣyasya lakṣaṇam evam</u> <u>śyāt tadapūrvam na</u> <u>sādhyaḍ/</u>	<570, 24> <u>lakṣyam hi lakṣaṇanaitada-</u> <u>pūrvam na prasādhyaḍ/</u>
<10, 21> <u>parasya ca tatsambandh-</u> <u>itva-</u>	<571, 1> <u>tasya ca tatsambandhitva-</u> ¹⁸⁾

1) Steinkellner, E., “Philological Remarks on Śākyamati’s Pramāṇavārttikaṭīkā”, *Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, Wiesbaden, 1997, p. 10.

sbaden, 1981.

- 2) 使用テキスト: PVSVT: *Karnakagomin's Commentary on the Pramānavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, edited by R. Sāṅkrtyāyana, Allahabad, 1943(Reprinted by Rinsen Book Co., 1982).; TBV: *Sammatitarkaprakaraṇam by Siddhasena Divākara with Abhayadevasūri's Commentary, Tattvabodhavidhāyinī*, 5 Vols., edited by Sukhlal Sanghavi and Bocardas Doshi, Ahmedabad, 1924-1931 (Reprinted by Rinsen Book Co., 1984).
- 3) 渡辺重朗,「古典 Cārvāka 派の認識論一断片の系譜一」(『成田山仏教研究所紀要』第17号, 1994年, pp. 11-130.)
- 4) PVSVT, 9, 3-10 (TBV, 569, 24-29). 両テキストの対応については, 第46回学術大会において配布したレジュメを参照されたい。
- 5) Ibid., 9, 11-13 (TBV, 570, 1-4). 6) Ibid., 10, 8-18 (TBV, 570, 14-24).
- 7) *Nyāyavārttikatātparyāṭikā* (Edited by Amarendramohan Tarkatirtha, 1936-1944, Calcutta) 152, 14-15.
- 8) Ibid., 152, 16-18. 9) TBV, 568, 30-32. 10) Ibid., 569, 7-11.
- 11) 当該部分において Abhayadeva は遍充関係が如何なるプラマーナによって把握されるか直接言及しない。ただし, 彼の時代のジャイナ論理学においては遍充関係を把握するものとしてタルカ (tarka) というプラマーナが認められていた。タルカについては, 藤永伸,「ジャイナ教の思釈」(『印度学仏教学研究』第41巻第2号, 1993年, pp. (101)-(104).) を参照されたい。
- 12) TBV, 569, 24-25 (PVSVT, 9, 3-4). 13) Ibid., 570, 4ff. (PVSVT, 9, 25ff.)
- 14) Ibid., 571, 21: tan nāśmanmate sarvopasaṃhāreṇa vyāptigrahaṇe 'numānān-utthānam/
- 15) 例えばミーマーンサー学派の svataḥprāmāṇyavāda 批判のため *Tattvasaṃgraha* を (TBV, 18ff.), 仏教徒の pramāṇadvitvavāda 批判のため *Ślokaṇvārttika* を (TBV, 574ff.) 利用するなどの例がある。
- 16) Abhayadeva は, Karnakagomin が対論者の典拠として挙げた, ジャイナ教の証因の特徴を述べた有名な韻文をそのまま引用している。積極的に認めるべき自派の学説が対論者の言明として述べられているにも関わらず, そのまま PVSVT を利用していることから, 自説を積極的に展開するのではなく他学派の典籍によって別の学派を批判するという Abhayadeva の態度がよく現れている。TBV, 569, 28-29. (PVSVT, 9, 9-10.): anyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim/nānyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim//
- 17) 当該箇所では TBV は PVSVT と完全一致しているが, 以下のジャイナ論書に基づいて訂正可能である。See *Prameyakamalamārtanḍa* (Edited by Mahendra Kumar, Delhi, 1990³.) 195, 8: tat pūrvoktānyadharmasya darśanād vyabhicāryate/
- 18) 当該箇所の代名詞 'tasya' は 'pūra' を指示する。故に PVSVT に見られる 'parasya' は 'pūrasya' に訂正可能である。

〈キーワード〉 Karnakagomin, Abhayadeva, ジャイナ論理学

(広島大学大学院)